

# 京都産業大学 ことばの科学研究センター 2022年度 第6回研究会

2022年11月30日（水）15:00～17:00

第二研究室棟会議室・Teamsによるオンライン開催  
オンラインによる参加の場合のみ center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp ヘメールでお伝えください

## 構文と「知覚者」： 宮沢賢治のドイツ語訳テキストからの用例を中心に

島 憲男

ことばの科学研究センター研究センター員・外国語学部教授

本発表はドイツ語の構文をいくつか取り上げ、当該構文間の共通性・関連性を横断的に捉えることを目的とする。具体的には、前回の研究発表以降に発表者が考察してきたことを中心に構文間の関係・関連性について考えてみたい。前回の研究発表では、独訳された宮沢賢治の複数の作品から収集した例文を用いて、発表者によるこれまでの構文研究の成果を検証するとともに、新たな展開の可能性も提示したが、今回はそこでの知見に基づき、それぞれの構文をどのように関連づけ、構文間に観察される「共通・共有項目」をどのように位置付けすることができるのかを提示したいと考えている。

今回の対象構文は、前回同様、①事態を引き起こす基底動詞と結果状態を表す**結果項**の相互作用によって名詞句の最終結果状態を描写する「**結果構文**」、②自動詞を基底動詞としつつも文中に主として同語源である**対格名詞**（＝**同族目的語**）を生起させる「**同族目的語構文**」、③日本語の擬音・擬態表現に相当すると考えられる**オノマトペ**が生起する文（**オノマトペ構文**）を取り上げる。

どの構文にも主要な特徴的文肢（つまり結果項、同族目的語、オノマトペ）が生起するが、今回の発表ではこれらの文肢は共通の重要な構文的機能を有していることを提示する。すなわち、これらの構文では、文中で明示的に言語化されているか、いないかにかかわらず、常に外界の状態を知覚する主体（＝知覚者）を想定する必要があり、その想定された知覚者が自身の知覚内容を当該構文中のそれぞれの文肢として言語化しているという意味で「主観的な」表現であることを主張する。当該の文肢はどれも文中の主動詞と意味的に密接に関連し、動詞の表わす出来事をより豊かに、より具体的に描写すると同時に、構文の中に話者や知覚者が外界の場面や状況から得た情報に基づいて下した自身の判断や解釈を付け加えていると考えられる。伝統的な文法観では互いに関連があるとは見なされてこなかった文法現象が、描写場面には必然的に存在する話者や知覚者といった言語使用者としての人間を介在させることで、類似の認知的機能を構文中から読み取ることが可能となり、予想以上に当該構文が互いに深く関連していることを現在構築中の「文法的ネットワーク」を通じて示してみたい。